

国際文化学部鹿毛敏夫教授の

「寿彭～84歳で最古の大工技術書～」が掲載

●大分合同新聞 2017年12月16日(土)

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

日本最古の木割書(寸法「御硯箱ノ寸」などの、大友氏館の内部で使用されたと評価された『木碎之注文』の史料中には、室町・戦国時代のさまざまな建築記録とデータが記されています。

筆録者の名前は「寿彭」。豊後府内の大工斎藤家の惣大工としての立場で、永禄5(1562)年から天正2(74)年に、84歳の高齢で筆録したとあります。2007年に寄託先の淡路文化史料館の許可を得て全丁の閲覧と撮影を行いました

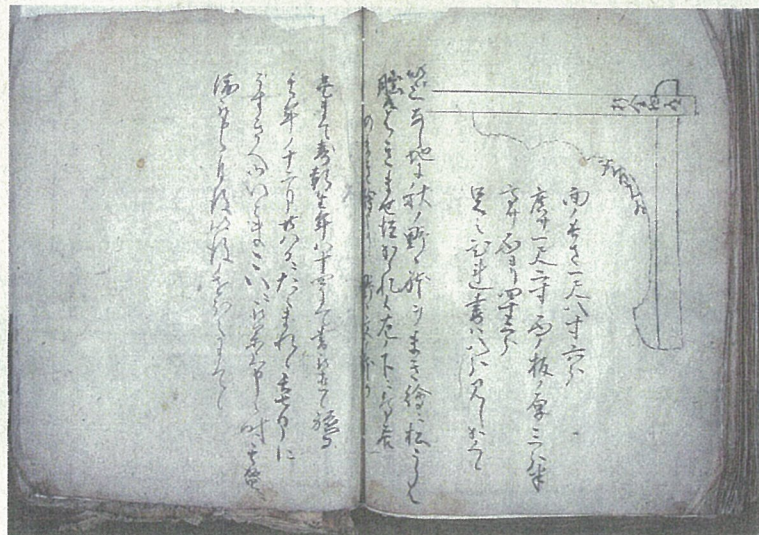
寿彭

が、80代とはとても思えない緻密でしつかりした筆致です。

『木碎之注文』の特徴は、建築物のみでなく、「御長持之寸法」や「しやうきはん(将棋盤)ノ寸」

載のある「二合舁」の容積が近世の「新京斗」の2合の約1・6倍に相当するところが、建築史学界で指摘されています。また「舁ノ寸」

84歳で最古の大工技術書



後ろから4行目に「是まで寿彭生年八十四にて書き直され候」とある『木碎之注文』

『木碎之注文』の記録から、大友氏のもとにあった分銅箱が、縦9寸×横1尺2寸×高さ8寸で、深さ2寸5分の「かけこ(掛け子)(内箱)」を有する構造だったことが分かります。実際に、府内の発掘現場からは、繭形分銅・太鼓形分銅や天秤皿などの秤量器具の遺物が多数出土しています。

また、分銅の大半には大友家定紋の三木紋を示す「三」の印が陽刻されていたことが、考古学的に明らかにされています。文献史学においても、16世紀の史料に、天秤での秤量を生業とする「計屋」商人が営業していた事実が判明しています。

載のある「二合舁」の容積が近世の「新京斗」の2合の約1・6倍に相当するところが、建築史学界で指摘されています。

これらのことは、文献史学で明らかになっている、16世紀半ばの豊後府内の豪商仲屋頭通が、容積規格の

84歳の惣大工寿彭が残した記録について、今後も多方面からの分析が進むものと期待されます。(名古屋学院大学国際文化学部教授)

Ⅱ毎月1回掲載Ⅱ